

西和賀町の地方創生と高等学校の魅力化を考える有識者懇談会
第1回会議 会議録（要旨）

○日 時：令和6年7月22日（月）10時～12時15分

○場 所：西和賀町役場湯田庁舎3階大会議室

○出席者：「関係者名簿」のとおり

○傍聴者：報道関係者5名

○会議の概要

1 委嘱状交付

内記町長から5人の委員に委嘱状を手交

2 町長挨拶

今般の懇談会委員に就任いただき感謝申し上げます。

懇談会のテーマである地方創生と高等学校の関係については、国、県それぞれで取組方針が打ち出されている。本町においても第2期まち・ひと・しごと総合戦略において、関係人口を含めた活性化に資する人材育成を町の最大の課題として捉え、その解決のための重要な施策の一つとして、西和賀高校の魅力化を通じた人材育成を掲げている。

本町の地方創生を展望するうえで、西和賀高校は極めて重要な存在であり、その動向いかなるかは町の将来にも関わってくるものと認識。JR北上線の存続問題にも直結している。

西和賀高校の更なる魅力化の取組や町との望ましい連携のあり方はどうあれば良いのか等について、専門的な見地から幅広いご意見を賜ることをお願いして挨拶に代えたい。

3 委員紹介

【高橋嘉行委員】

以前に教育行政に携わった経験があるので声がかかったと思っている。議論を重ねながら皆さんと一緒に一定の方向性をまとめていきたい。

【藤岡宏章委員】

元々中学校教員をしており、高校とのつながりも非常に強いところにいたので、そのあたりから議論に加わっていきたい。

【上原耕太郎委員】

平成15～16年度に西和賀高校の教頭を経験して以来、途中9年間のブランクをはさんで、平成26年度から切れ目なく現在までいろんなかたちで西和賀高校と関わらせてもらっている。高校と町が良い方向に行くような話し合いにしたい。

【渡部芳栄委員】

大学教員であり、高校と地域の関わりでは多くの経験はないが、西和賀高校の取組を学びな

がら、力になれるところで協力していきたい。

【熊谷智義委員】

民間コンサルタントとして「西和賀高校魅力化ビジョン」の策定に携わった経験があり、その際に収集したいろいろな情報なども提供していきたい。

4 座長選出及び職務代理者指名

【事務局】

設置要綱第4で、委員の互選により懇談会に座長を置くことになっているが、いかがしたら良いかお諮りする。

(事務局一任の声)

それでは事務局から指名させていただくこととし、座長は高橋嘉行委員にお願いしたいがいかがでしょうか。

(異議なしの声)

ご承認ありがとうございます。それでは座長は高橋嘉行委員ということで決定する。次に、設置要綱第4の3で座長の職務代理者をあらかじめ座長が指名することになっているが、早速で恐縮だが座長からご指名いただきたい。

【高橋座長】

職務代理者は渡部委員にお願いしたいが、渡部委員いかがですか。

(渡部委員から「はい」の声)

【事務局】

それでは座長職務代理は県立大の渡部委員にご就任いただくことで決定する。座長の高橋委員には座長席にご移動いただき、以降の議事進行をお願いしたい。

5 議事

【高橋座長】

皆さんの協力のもとに会議を進めていきたいのでよろしくをお願いしたい。次第にしたがって進めていくが、5の議事は(1)から(4)までであるが、これはそれぞれ最初に事務局から説明をもらった後に委員から質問や意見交換するという進め方でよろしいか。

(事務局「はい」)

それでは、「(1) 懇談会の設置趣旨及び運営について」を議題とするので、説明をお願いします。

【事務局】

(資料1に基づき説明)

設置要綱に書かれていない懇談会の運営に関して補足させていただくが、会議の回数について、事務局としては年内に3回程度開催して、意見集約のうえ町長に答申いただく想定である。ただし、この3回の後でも必要に応じて、任期の範囲でまた会議を開催する場合もあるので、よろしくをお願いしたい。

【高橋座長】

事務局から懇談会の設置要綱と今後の会議の開催の予定について説明があったが、委員の皆さんからご質問等ございませんでしょうか。

(なし)

それでは「(2) 地方創生における高等学校の位置づけ」ということで、先ほど内記町長の挨拶でも熱い思いを語ってもらったが、あとは事務的に一つずつ説明いただきたい。

【事務局】

(資料2に基づき説明)

【高橋座長】

ただいまの説明に対し何かご質問ございますか。

Society5.0ということで、縄文の昔から現在まで大きな社会変革、大きな波が今まで4つあって、今度はA Iも含めた要はD Xの社会。そうした中で人材養成というのは極めて重要だということで、国も県も地方創生と連動させて力を入れて取り組んでいるという流れ。その流れを受けて、西和賀町はまさにそれ以上により高等学校の位置づけが重要になっているという理解でよろしいか。

【事務局】

専門家である委員の皆様の前で素人が説明できる内容ではなかったが、高橋座長が県教育長時代に始まった動きだと認識している。当時、まさに現場の最前線で取組をリードされておられた方であり、そのようなご理解でよろしいかと思っている。

【高橋座長】

私の在任中の最後のあたりの話だったということで口火を切らせてもらった。質問以外でも委員の皆さんの経験からご発言できることがあればお願いします。

【渡部委員】

D Xという話が出てきたが、これは単なるデジタル化ではなく、その先に新たな価値を生み出すものだと思う。おそらく学校現場はデジタル化がなかなか進みにくいのではないかと想像しているが、現状はどうなっているのか、もし今回回答可能であれば教えていただきたい。

【柿崎教育長】

コロナ禍で一斉に学校が休みになった時期があり、その際に「学びの保障」ということで一気に「G I G Aスクール構想」というものが進められて、1人1台タブレットが緊急に配布された。現在は様々なソフトを使いながら授業展開されており、子どもたちの資質能力を高めていくことに活用している。また、休んでいる子どもにはリモートで学校からのお知らせを配信したり、最近ではA Iを搭載したソフトプログラムを導入して学習に役立てている。

【渡部委員】

地方創生は経済の活性化ばかりでなく、子どもや学校を通して、大人も巻き込んでまちづくりや人づくりが進んでいくことかと思うが、子どもたちがやっていることが保護者だけでなく、地域や町全体に拡大していき、デジタル空間のような感じで町全体で共有できるような仕組みができればおもしろいのではないか。

【柿崎教育長】

なかなかそこまでには至っていないのが現状であり、これからの課題だと思っている。

【内記町長】

Y o u T u b eも広い意味でデジタルに入るのかもしれないが、西和賀高校のP R動画をY o u T u b eで配信しており、町民の皆さんの理解促進に役立てている。その動画は本日後ほど紹介する予定。

【高橋座長】

他にございませんか。はい、上原委員どうぞ。

【上原委員】

私が西和賀高校にいた平成15年、16年頃は、県内から小規模高校をどんどんなくしていくと

いう流れだった。西和賀高校もその対象にされて非常に慌てたという経験を持っている私からすると、逆に小規模高校を核とした地方創生という方向に完全に舵が切られている今の世の中の変わりように驚いている。当時から地元の高校を無くしたくないという熱意を町の人たちが持ち続け、今まさに大きな炎となっている。委員の皆さんの意見をうまく集約して、さらにこの炎を燃やしていければいいのではないかと思っている。

【高橋座長】

自分の経験で恐縮だが、県内で少子化が加速していくなかで、新しい高校再編計画が必要となり、東日本大震災による凍結期間を経て、平成26年にその計画策定に着手した。その中で、高校の本来の適正規模は4～6学級とされていたが、西和賀高校と岩泉高校、葛巻高校の3校については、交通アクセスの問題や地域事情などから、たとえ1学級になったとしても、これらの地域には高校が絶対に必要だということで特例校という扱いにした。こうした経緯を踏まえて、西和賀町でも地域の皆さんの議論によって、説明にあったような位置づけにしてもらったということは非常に意義深いこと。今後の課題も大きいと思うが、この懇談会の意見交換などを通じて、町と高校が良い方向に向かっていくように取りまとめていきたいと思っている。

他に何かありませんか。

(なし)

では続いて「(3) 西和賀高校の魅力化の取組について」を議題とするので説明をお願いします。

【柿崎教育長】

(資料3、令和7年度入学者用学校案内、YouTube動画視聴、ユキノチカラ新聞により説明)

【高橋座長】

動画も含めていろんな情報提供いただいたが、皆さんから確認したいこと等あればお願いしたい。はい、藤岡委員どうぞ。

【藤岡委員】

素晴らしい動画も拝見し、もう十分に魅力を発信されていると感じた。私は、小さな自治体で教育を進めていくときのキーワードが二つあると思っている、一つはエリアメリットをどう生かすか。もう一つはスケールメリットをどう生かすか。つまり小さいからマイナスなのではなく、小さいからフットワーク軽くできることがある。小さくても残っている自治体にはそれなりの魅力があるから残っているので、それを子どもたちにどう教えていくかが人材育成の面でもすごく大事だと思っている。

このスケールメリットとエリアメリットというものを教育者側がどう理解し、そして地域とそれを共有し合い、子どもたちを育てていくという風土、雰囲気はどう作っていくかが大事になってくる。魅力化とは、ここでしかできないことをやることではないかと思っている。例えば、ハロウィンインターナショナルスクールがなぜ注目を浴びるのかと言えば、そこにしかない魅力があるからで、ここに学ぶべき点があるのではないか。

地方創生と高校の魅力化を議論する際に気をつけなければいけないことは、どうしても大人の視点、思考に偏りがちなところ。ところが今日の文科省の資料には「生徒が『やりたいこと』を見つけられる教育機関への転換」とある。つまり生徒のニーズとこちら側が進めようとしていることの乖離をいかに防ぐかが大きなポイントになってくるのではないか。今の中学生や高校生は、自分らしさをどう出せるか、一人ひとりの存在を実感できるところで学びたいと思っている。自分の存在価値を肌で感じられるところを求めている。

そして、教育サイドの種まきとしては、生徒たちに地域社会への参画意識をどう植え付けていくか。そのあたりのバランス作りをどのようにしていくのか。これは本当にやりがいのあるテーマで、どこの自治体でも取り組みたいと思っているが、今回の懇談会がその具体性を持たせていくきっかけとなっているものであり、素晴らしいと思っている。

【柿崎教育長】

県教委が昨年7月に実施した「中学生の進路希望等に関するアンケート」によると、1～3学級の小規模校を進学先として選択している生徒が40%もいた。藤岡委員がおっしゃるように自分の存在価値を感じることができたり、地域への参画意識を持つことができるといったことが求められているのだと思っている。私たちが西和賀高校を守っていく理由の一つは、こうしたニーズに応えていくためでもあると思っている。西和賀町は人口も5,000人を切っているが、アットホーム的な町で子どもと大人が共に学び合えるような地域を目指していきたいと、藤岡委員のお話を聴いてあらためて思ったところ。ありがとうございました。

【高橋座長】

他にございませんか。はい、上原委員どうぞ。

【上原委員】

せっかく資料を準備いただいているので話題提供をさせていただく。資料3の37ページで西和賀高校の卒業生に大学院進学希望者がいることになっている。このうちの1人は私も知っている生徒だったが、高校時代に公営塾の教室で分厚い哲学書を読んでいるような生徒だった。西和賀高校にこんな生徒がいることに驚いた。非常に志が高く、将来は地方自治に携わりたいという希望があって、努力を重ねた結果、つい先日、北海道教育大学函館校から慶応大学SFCの大学院に合格を果たしたと聞いた。小規模校であってもこのような人材が育っている。

町と高校との連携で肝心なことは、町の姿勢と高校側のやる気。幸い今の西和賀町ではうまく機能していると思っているので、是非全国のモデルになるような取組を期待したい。

【高橋座長】

ありがとうございます。今の上原委員の話は、地域の熱意、高校の適切な指導、本人の情熱があれば、小規模校でも様々な選択肢に挑戦できるんだということだったと思う。それから動画の中で、「小規模校だからこそ勉強や人間関係含めて自分にとっては居心地がいい」というコメントをしている生徒がいた。こうしたところから、これから進むべき方向性というものが出てくるのではないか。

私がお聞きしたいことは、西和賀町にある高校とは言え、県立高校である西和賀高校と町がどうやって連携を図ってきたのか。組織の壁というものはないのかということ。どんなに町が一生懸命やろうとしてもそれが高校側にうまく伝わらないとすれ違いになると思うが、現状はどのようにしているのか。

【柿崎教育長】

今日の事務局の説明にもあったように、地方創生と高等学校の位置づけは明確になっているが、実際の現場はどうなっているのかということかと思う。やはり高校側の理解をいただくよう高校がやりたいことと町がやりたいことをコラボしていかなければならないと思っており、町教委もマンパワーが不足しているなかで、高校には毎日のように足しげく通いながら、高校のニーズと私たちがこうしたいと思っていることのすり合わせをできるだけ丁寧に行っているつもり。校長先生はもちろんだが、校長先生以外の教職員とも交流を深めながら、いろんなかたちで理解いただくよう努力している。

【高橋座長】

一義的には、まず校長先生との連携が大事だが、実際に生徒と向き合っているのは一般の先生たちなので、そういう方々に対する配慮も大事。そうやっていけば町との連携の道も太くなってくると思う。

熊谷委員、ご発言をお願いします。

【熊谷委員】

私からも情報提供したいが、西和賀高校魅力化ビジョンの策定過程で、西和賀高校を卒業して国公立大学に進学した学生にインタビューを行っている。コロナ禍もあって、実際にはオンラインで4人の学生に話を聞いたが、大学に入ってみて、他の高校から入ってきた学生と学力

面でハンデを感じることはないかという質問をした。これには皆さん「ほぼ感じてない」という答えだった。某大学に入った学生は、同級生に盛岡一高出身の学生がいたが、その学生と自分を比べても「なんの差も感じません」と話していた。それだけ西和賀高校のカリキュラムが充実しているということが分かったインタビューだった。また、高校生活を振り返ってみて、他の学生と話していて何か感じることはないかと聞いたが、「春夏秋冬それぞれに西和賀だからこそできる体験や学びがあり、高校時代にそういう経験をしてきたのは自分しかいない」と誇らしく話してくれた学生もいて、話を聞いてこちらも感動を覚えた。

それから在校生30人にもインタビューしていて、西和賀高校に入る前のイメージを聞くと、「自然が多い」とか「アットホーム」だとか、「小規模」などであったが、1日体験入学で実際に見聞きした印象が決め手になっていたようだ。また、実際に入ってから声を聞いても、生徒一人ひとりに寄り添った丁寧な指導体制や先生と相談しやすい関係性が作られていることなどで非常に満足度が高いと感じた。

保護者を対象としたアンケートでも「高校が楽しいようで、積極的に通っている」など、非常に好評な結果で驚かされた。

ただ、一方で先生たちは大変だろうかと心配になった。しかし、教える側にとっても、単なる偏差値教育ばかりでない、地域の小規模校で多様な学びに対応していくことで、楽しさややりがいを感じ、そうした経験をする中で教員として成長していく場にもなっているのではないかと感じた。

【高橋座長】

今、教員の働き方改革という問題がクローズアップされているが、教員採用試験の受験者数が激減している要因にもなっているものと思っている。これに関してはいずれ改善が進んでいくものと期待している。

多くの教員と話をしてよく聞くのが、忙しくて大変ではあるが、子どもたちの成長を通して自分自身も成長できるところにこの仕事のやりがいを感じていると。そしてその子どもたちと長く付き合えること。そういう人と人とのつながりを長く持ち続けられていることが自分の財産になっていると。教職に就いていることに対する満足感が高い人は多くいるんだということを先ほどの動画を観ても感じたところ。

他に何かございませんか。

【柿崎教育長】

今日説明していない資料があるので触れさせていただく。

(資料4の紹介)

【高橋座長】

ありがとうございました。

先ほど西和賀高校の在校生の推移の説明があった。そして昨年度の受験者数は50人近くいたが、その辺の説明というのは後から出てくるのか。

【事務局】

この後の「更なる魅力化の取組方針」とも関わる話でもあるが、ここで上原委員提供資料にそのあたりの詳細なデータもご用意されているようなので、よろしければ、こちらの資料をご説明いただければと思います。

【上原委員】

(上原委員提供資料に基づき説明)

【高橋座長】

ありがとうございました。

それでは、協議事項の最後「(4) 西和賀高校の更なる魅力化に向けた今後の取組方針について」説明いただき、あとはそこで意見交換したいと思う。

【事務局】

西和賀高校の魅力化については、現時点でも十分に魅力化が進んでいると思っているが、全国に先がけた取組で1学級から2学級に定員増を果たした島根県の隠岐島前高校でさえ、現状に満足して手綱を緩めた瞬間に再び存続のピンチに見舞われるという危機感を常に持ちながら更なる取組が今も休みなく行われている。

西和賀高校も決してここがゴールだとは思っていない。今後さらに魅力化を進めていくために絶対に必要なことは、もっと生徒数を増やしていくこと。すなわち地方創生のための関係人口の分母を増やしていく必要があるという認識。

資料5は、先月行われた西和賀町から岩手県に対して町政課題の解決のために毎年行っている要望項目の説明。今年は西和賀高校の1学年2学級80人定員化を要望項目の1番目に据えて最重点事項として要望を行った。この要望会に同席した北上選挙区選出の4人の県議会議員全員から西和賀高校の定員増の件について触れてもらった。最後に達増知事からも真っ先に西和賀高校の定員増について前向きに検討してもらいたいと明言があった。

資料6は、6月の県議会一般質問でも西和賀高校の定員増の件が取り上げられ、この際も達増知事から前向きな答弁があったが、それを踏まえた再質問に対して、県教育長から「複数年定員超で学級増」という旨の答弁があった。この「複数年」という部分を本町としては問題視している。これは逆の見方をすると「複数年しないと西和賀高校の定員が増えない」というメッセージにもなる。1年1年が勝負の受験生にとってはマイナスのメッセージであり、昨年度4人の不合格者が出ていることを分かっている今年の受験生やその保護者に対しての心理的な影響が少なからず出てくると思っている。本町としては、複数年ではなく直ちに今年から定員を増やしてもらいたいと考えている。この点に関して、委員の皆様からご意見いただきたい。

【高橋座長】

県教委の考え方は、今年と同じような状況であれば来年度から学級増にする余地があるのかどうか確認する必要があると思うが、現実的には来年度の学級編成については今年の8月か9月には大体固まる。ただ、それ以降の状況が全く考慮されないわけでもなく、何らかの具体的な動きがあれば検討する余地はあると思う。一方で何人受験するかどうかは、年が明けてからでないと数字は見えてこないのので、その辺の難しさはあると思う。

これに対する直接的な私の考えは今時点で示すことはできないが、少なくとも1学級と2学級ではドラスティックに教育環境が大きく変わってくる。教員定数の問題で言うと、今2学級で習熟度別授業やっているとと言っても、それは本来1学級でやるところを無理して習熟度別の教室を設定しているわけで、基礎定数が確保されればいろんな教育課程に応じた教員の配置ができてくるので、「教育環境を良くしたい」という強い気持ちを持つことが大事。高校側ともしっかりと考え方をすり合わせる必要がある。高校の理解を得ないことには進まないと感じている。

上原委員はこの件で何かご意見ありますか？

【上原委員】

この資料7をご覧ください。これは、島根県の隠岐島前高校の魅力化の取組に中心的に関わった現島根大学准教授の中村先生が先日西和賀町に来て講演した内容を柿崎教育長がまとめたもの。2ページのグラフ。隠岐島前高校はもともと3学級だったのが2学級になり、2006年には1学級になった。何とか2学級に戻そうとプロジェクトを開始し、2012年に2学級にするという目標を立てた。その理由は、その年は町内の中学3年生が若干多い年だったことと、全国からの留学生も増えてきていたこともあったが、前年の2011年は40人しか入学していない。定員を超えていなかった。1回も40人の定員を超えていないにも関わらず、翌年いきなり2学級にして59名入ってきた。結局、実績がないまま2学級にしている。これは町が県や国に強力で働きかけた成果だったと聞いている。

したがって本県の場合も、「複数年超えないと増やさない」ではなくて、西和賀高校の場合、すでに今春の高校入試で48名の受験があり、定数を超える44名の合格という実績に加え、今後も50名を超える出願の見通しがあるし、町も魅力化に取り組んでいる、町と高校との盤石な連携もあるという背景を踏まえて、また、今年8月の1日体験入学にも104名が来る予定になっているとのことなので、そういう流れもあるので、島根県を見習って岩手県にも英断を下し

てもらおうとありがたいというのが先ほどの事務局の説明に込められた思いなんだろうと感じている。

【高橋座長】

ありがとうございました。渡部委員は何かご発言ありますか。

【渡部委員】

大学だと定員を超えるほうが誇れるというか、要するに倍率が高いほうが良いと一般的には言われるが、高校の場合だとやはり昔から「15の春を泣かせるな」という言葉もあるように、1年度でも不合格になった生徒がいるという事実を強調してもいいのではないかと。今は高校もほぼ義務教育になっているので、それが全く無駄ではないかもしれないが、そこで無駄につまづかせることのダメージ、影響というものは軽視できないのではないかと。

【高橋座長】

確かに今は高校進学率も99%を超えており、小中の義務教育と直結した教育課程になっているという理解でいる。ただ一方で少子化はどんどん進んでおり、北上市内からあれだけの生徒を継続して呼び込んでいけるかどうか。北上市内の高校もそれなりの努力をするだろうから気を緩められない。

少し話が違いますが、今私がいる大学の附属高校野球部の関係者から聞いたが、県外留学生が非常に多いが、一本釣りでも来てもらっているわけではなく、ほとんどが先輩を慕って後輩が入ってきているとのこと。西和賀高校にも今年県外から留学生が入学しているが、その生徒たちの先輩後輩のつながりで、また西和賀高校に県外や北上市内から生徒が入ってくるというような、そういう発信ができれば大きな力になってくるのではないかと。先ほど上原委員からオープンキャンパスの話もあったが、その辺もメルクマールになるかもしれない。

【柿崎教育長】

オープンキャンパスは、去年も大体110名来てもらった。体験入学に来る生徒によって、合否の相関関係は何らかのかたちであると思っている。魅力化ビジョンの中にもあるが、志望校を決定した理由の中に体験入学が大きなウエイトを占めていたし、それから高校説明会で直接高校の校長先生たちが行って説明をするというのも大事な要素になっている。

県外募集で言うと、東京で対面での説明会をやったときは、かなりの人数の生徒たちが自分の今いるところとは別のところで学びたいという人が集まっていた。また、隠岐島前高校と西和賀高校を比べてこっちに来たという生徒もいた。町と高校が連携していることをすごく心強く感じたとおっしゃっている保護者もいた。今、都市部から地方に出て行こうとする生徒たちがものすごく増えてきているなかで、それを妨げずに、地方で学びたいという気持ちを最大限受け入れて、今のうちから岩手県に取り込んで、先ほど座長さんもおっしゃっていたように、岩手の魅力を情報発信していただければ本当にありがたいことだと思っている。

このような取組をやれている県だとなれば、今どこの県でも苦勞している教員採用試験の受験者も増えてくるかもしれない。先日、岩手大学の先生が来られて、教育学部の学生の中でも地域の小規模校に行くのを苦手としている学生がいるので、集中講義で本町のようなところの小規模校で研修させたいという話もあった。私はこの話を前向きに検討したいと思っており、そこでいろんな魅力や小規模校で学ぶおもしろさなどを伝えられれば、学生たちの意識も変わってくると思っている。

高校も同じように、せっかく岩手の高校に行こうとしたのに1回でもダメとなればもう戻ってくることはないし、逆に「岩手の高校は行きにくい」という風評被害を引き起こしてしまうのではないかとと思っている。

【熊谷委員】

私もすごく思うのは、地方創生の流れというのは確実にあって、今は決して多くはないが、地方への動きというものがある。実際に東京での説明会でも反応がいいということなので、こういう状況の中で、入りたいという人をお断りしたり、あるいは地元の人もお断りしたりする状況というのは、全く話にならないと思う。だからここで、多様性を重視した小規模校を伸

ばしていく方向に大きく転換して、みんなで学んで、そして先生方にも頑張ってもらおうという雰囲気を作っていく意味で、この流れをストップさせてはいけないのではないかと考えている。

【高橋座長】

今まで聞いていて、まず48人の生徒に志願してもらったというのは、並々ならぬ努力の結果だったと思う。いわばその炎が今燃え上がっているところで、その炎をそのままにして消してしまったら、また元の状態に戻すにはものすごいエネルギーが必要になる。地域の皆さんの熱意、いろんな人たちの力を結集した成果だったと思うので、そうだとすれば、まずは県教委にいかにしてその気持ちを直球でぶつけていくか。町と高校とが一体になって、しっかりとその情報を伝えるということが必要ではないかと思うが、藤岡委員はその辺いかがお考えですか。

【藤岡委員】

私もその通りだと。大事なことは、なぜクラス増なのかという説得力だと思う。県教委もその点は理解していると思うが、いろんな制度の関係上なかなか難しいのではないかと。座長さんも触れていたが、学級増になると教員定数の問題が出てくるので、そのタイムラグをどうするのかという問題もある。これまで努力してきたプロセスをどう伝えていくのかということ、私はやはり生徒にとってどういうメリットがあるのかということ、生徒の立場に立ったときに「なぜそうなんだ」というあたりを強く出していく必要があるのではないかと。

併せて、これからの課題としては情報発信で、どれだけ発信力を高めていくか。発信の内容のクオリティを上げるかということ。大人側の発信もそうだが、生徒自身の言葉で発信の機会を多くしたいと思う。その両面がすごく大事で、中学生は先生の話よりも先輩や友達の話をよく聞くところがあるので、そこをうまく刺激していくことと、あとユキノチカラ新聞を見させていただいて、これだけアントレプレナーがいるので、生徒たちにとって大事なものは、第三者から地域を認めてもらう、学校を認めてもらうということが大事なキーワードになってくると思う。当たり前すぎて分かっていないことがたくさんあるが、他の人から見るとすごいことだということにあらためて気づくということ、これを基盤にして情報発信をさせていく流れを作る。そういう声をうまくまとめながら学級増の流れを設計されたらいいのではないかと考えた。

【高橋座長】

もしこの学級増が実現すると岩手の高校再編の流れの中で初めてのことで、大きな出来事というインパクトがあることだと思う。今日はもう時間もないが、今日出されたいろんな意見を参考にさせていただきながら、町としてのアクションを検討いただく必要があるのではないかと考えている。本当はもっと時間かけて議論したいところだが、今日は第1回目ということで、次回にまたいろんな意見交換をしながら、今後、西和賀高校はいかに魅力化を図って共感を得られる学校になっていくか、町としての姿勢はどうあるべきかということ、我々からご意見を申し上げていければ良いのではないかと考えている。

本日の会議は以上で閉じさせていただくが、事務局で何かありますか。

【事務局】

時間が過ぎていて恐縮だが、せっかくなので資料8を紹介させていただきたい。これは事務局で行った西和賀高校の入学者の将来推計だが、令和6年度までは実績で、令和7年度以降が推計になっている。これはあくまでも学級増を果たした場合の推計であり、学級数がそのままではならない。西和賀高校の学級を増やしたとしても、この少子化の中で本当に生徒が入ってくるのかと言われたときのための推計を作ってみた。

上段が町内だが、もちろん生徒数が減っていく。令和6年度は町内から西和賀高校に入ったのは42.9%だった。このパーセンテージを徐々に上げていき、最終的には75%ぐらいまで町内から西和賀高校への入学者の率を上げていきたいと思っている。そうなるとこのとおりの入学者の数はこれぐらいの水準で維持できる。

下段は北上市内だが、北上市内も少子化で生徒数はどんどん減っていく。減っていくが令和6年度、北上市内の在籍数の3.3%が西和賀高校に入学している。この割合も徐々に上げていき

たいと思っており、ここには出していないが、最終的には5%ぐらいまで、大体北上市内の中学生の5%に西和賀高校に入ってもらいたいと思っている。もちろんそのための取組を継続して展開していく必要がある。

それから一番下その他のところは主に県外留学。これも8人ぐらいまで増やしていきたいと思っている。そうすると令和7年度で51人、令和8年度で52人、以降50・50・54・57・58・55・52・53ということで、これぐらいの入学者は確保できるという見込みをしている。

資料8の説明は以上で終わり、その他に移るが、事務局からは特に用意していることはないが、委員の皆様から何かあれば出していただきたい。

【高橋座長】

次回の会議はどのようなタイミングになるのか。

【事務局】

先ほどの学級増の件もあるので、当初のスケジュールよりも少し前倒しで次回の会議を開かせていただきたいと思っている。座長や他の委員とも日程調整させていただきながら、追って連絡をさせていただきたい。

【高橋座長】

日程調整は丁寧をお願いしたい。

【事務局】

承知しました。

それでは時間超過して申し訳ありませんが、これを持ちまして西和賀町の地方創生と高等学校の魅力化を考える有識者懇談会第1回目の会議を閉じさせていただきます。ご協力大変ありがとうございました。